

Ⅲ. 研究の内容と実践

1. 4歳児

実践事例 1

『T男の姿をおって』

—日々の保育の記録から—

(1) 対象児

2年保育 4歳児 22名(男児10名、女児12名)

(2) T男の実態

① 家庭環境

T男の家族は父母、小学校4年生の兄、小学校2年生の姉、3歳の妹、祖母、曾祖母、叔父の10名という大家族である。祖父母は酪農を営んでおり、園から徒歩10分程の距離にある広い敷地内に住んでいる。その敷地内には、牛やにわとりや犬、猫等多くの動物がいる。またプラタナスの木やツツジ、ライラック、薔薇の花が咲き、自然に恵まれた環境の中で暮らしている。

T男は生き物がとても好きで、園から帰ると祖父と一緒に、にわとりに餌をくれたり、牛の餌を子ども用の一輪車で運んだりの生活である。父親は消防署に勤めており日中休みのこともあり、送り迎えを行なったりT男と一緒に遊んだりする時間が多くとれる。また母親はとても教育熱心であり、入園前には年子の妹と一緒に、近所の公園へ毎日のように出掛けて行って、固定遊具や砂場で遊ばせ友達に慣れるようにしていた。公園で遊んでいる子どもは年下の子が多かったが、すぐに友達になり、一緒に遊んでいたということである。

T男の兄弟は4人という子どもの多い家庭に育っているが、それ以上に大人が多くいるためT男の甘えや要求、欲求がいつも満たされる環境にある。

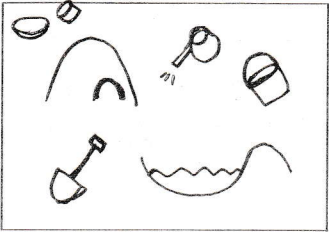
② 入園当初の姿

入園当初からとても元気がよく、活発であったが、ブロックや積木を投げたり、作った物を壊したりと少し乱暴な面も見られた。また降園時等には、みんなと一緒に椅子に座っていることができずふらふらしていることが多かった。

その反面、少しでも友達に叩たかれたりすると、めそめそと泣いて教師に甘えたり、抱っこやおんぶをせがんできたりすることも多く見られた。

(3) T男の姿から

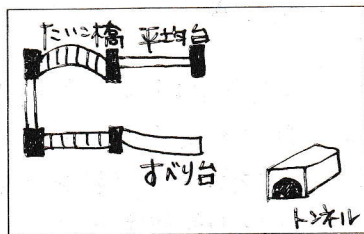
♥…教師の思い

日時	幼児の姿	教師のかかわり
4/16	<p>・一人で積木を高く積み上げたり、くずしたりして遊んでいる。</p> <p>(周囲には同じような遊びをしている幼児が2～3名程いるが、それぞれが個で遊んでいる。)</p>	<p>・早く園生活に慣れて楽しく遊べるように、積木等を用意しておく。</p> <p>♥一人で積み上げていた積木がくずれる様子を楽しんでいるようだが、早くお友達ができ、一緒に遊べるといいな。</p>
4/25	<p>・仲良くなったR男や、D男と一緒に積木を高く積み上げて、遊ぶ。</p> <p>(R男やD男は、T男の言いなりになって、積木を渡しているだけである。)</p> <p>・「先生見て！高いのできたよ。」と自分より高く積み上げた積木を、自慢げに見せる。</p>	<p>♥一人ではなく友達とかかわれるようになってきた様子を見てうれしく思うと同時に、R男やD男を自分の思いのままに動かすのではなく、一緒に遊ぼうとする気持ちになってほしい。</p> <p>・「すごいね。すごく高いね。」とT男の感動を受けとめ喜びを共感する。また「みんなで作るといいのができるね。」と友達と一緒に遊ぶことの楽しさに気付かせるような言葉をかける。</p>
5/27	<p>《砂場》</p>  <p>・T男が自分から進んで、R男やS子、Y子と一緒に砂場に深い穴を掘り水をためて、「温泉だぁー」「気持ちいい」と言って遊んでいる。</p>	<p>・多くの友達とかかわって遊ぶことができるようにと、砂場遊びを設定し、遊具を用意しておく。</p> <p>♥友達と遊ぶ楽しさがわかったのかな。よかった。T男はいろいろな遊びを考え出すな。今日もおもしろい遊びをしている。この遊びが広がり友達とのかかわりをもって遊んでほしいな。</p>

・穴を掘っているのはT男とR男ばかり、水を汲んでくるのはS子とY子ばかりである。

・「そっか」「じゃあ僕行ってくるね。」と言って水を汲みに行くが、一度水を汲んできただけで終わってしまい、結局またS子とY子が水汲みをしていた。

《ホール》



・たいこ橋、平均台、すべり台等で楽しそうに遊んでいる。特に、動くトンネルが気に入ったらしく、数人の友達と中に入ったり、押ししたりして遊んでいた。

・T男はK男とトンネルの中に入ることと争い、自分の思い通りにならずに泣く。

・しばらく泣きやまずにいた。

♥S子とY子は水汲みばかりで楽しいのだろうか。水を汲んでいる二人の様子を見ると楽しそうな表情なので、このまま様子を見ていることにしようかな？しかし、T男に自分ばかり楽しい思いをしないで、友達と交代しようとする気持ちをもって欲しい。

・「ずーとSちゃんとYちゃんが水汲んでるから、今度はT君とY君が水汲んできたら。」とバケツを手渡す。

・雨が降っていたため、室内でも体を思いきり動かし、気持ちを開放して友達と一緒に遊べるようにと、ホールに巧技台を設定したところ子ども達は喜んで遊びに加わってきた。



・しばらくT男とK男の様子を見守っていたが、泣いて自我を通すT男の心をおしはかりながら、「我慢できるかな？」と言葉をかけ、思い通りにはならないこともあることを伝える。

♥まだまだ自分中心なんだな。どうしたら我慢する心が育つだろうか。気長に指導していこう。

・T男とR男が早速深い穴を掘り、ヒューム管を通して水を流しはじめる。「海だー！海ができたぞー。」

(T男らの隣で同じように、H男やA男らがヒューム管に水を流して遊んでいる。)

・「そうしよう。そうしよう。」と言って二つの海をつなげはじめる。

・R男がヒューム管の位置を変えようとすると、T男が「だめだよ。水はこっちから流すんだよ。」と強い口調で言う。

(しばらく遊んでから、R男、H男らは、「あっちで山つくろう。」と行ってしまった。)

10 /16 ・友達と4～5人で泥山で土を集めて、山を作って遊んでいる。

・「先生、水使いたい。」と言う。

・土の山に水をかけたり、シャベルで穴を掘って水を流したりして遊んでいる。そのうちにR男やA男と、泥だんごを作り始める。

・砂場遊びを設定した。友達と協力し、譲り合って遊べるように、ヒューム管をいくつか用意しておく。

♥T男のアイデアはおもしろい。いい発想をするな。H男達と一緒に遊べばいいのにな。

・「T君の海、すごく深いね。H君達のも深いよ。二つつなげたらすごく大きい海になるんじゃない？」

♥同じような遊びをしている二箇所の友達が一緒に遊ぶことで、友達関係が成立してほしい。

・T男がR男の気持ちも受け入れて遊べるようになるのはまだまだ難しいのかな。自我を少しずつおさえ、自分の気持ちをコントロールできるようになって欲しいな。

♥あーあ、また一人になっちゃったな。いつになったら友達と一緒に楽しく遊べるだろうか。

・そこでバケツやシャベルを出す。



・「先生見て！僕、おだんごできたよ。」「この砂かけると固くなるんだよ。」

(K男が「誰か水汲んできて。」と言う。)

・「僕が水汲んできてやるよ。」と言って走って水を汲みに行く。

・照れくさそうにして行ってしまった。

・「僕のおだんご固いよ。」「さわっていいよ。」とおだんごをもってくる。

・「僕のが一番遠くまで行ったよ。僕のおだんご壊れなかった。」

・「T君おだんご上手だね。先生におだんごの作り方教えて。」と言って、教師も一緒におだんご作りをする。

♥うれしい。T君が友達のために水を汲んできてあげようという気持ちになった。

・「T君水汲んできてあげたんだ。優しいね。」と友達のためにしてあげた行動を誉める。

・「ほんとだー。すごく固いのできたねー。」「じゃあ、山の上から転がし競争しよう。」と言って他の幼児も誘う。

(4) 考察

入園前の家庭生活では、自分の思いや願いがかなうことが多くあったであろう。しかし、幼稚園という集団の中に入った時、自分の思いが通らないことや、我慢しなければならないことが増えてくる。

T男も入園当初には、遊びや生活が自分中心であったのが、園生活を送るにつれて集団生活に慣れ、徐々に周囲の友達を意識して生活が行なえるようになってきた。

T男はすごく良いアイデアを持っていて、遊びが楽しく魅力的である。そこでR男達のように、T男の仲間になって遊びはじめるが、T男が自分の考えを強引に通す面があるので、楽しく一緒に遊んでいた友達も、だんだんと離れていってしまう。T男自身、自分の思いを強く出しすぎて、友達に受け入れてもらえないというさびしい経験や、また逆に、自分の思いを友達に受け入れてもらったという満たされた経験も味わっている。日々友達と遊ぶ中で、そのような経験を繰り返すうちに、友達と一緒に遊ぶことの楽しさがわかり、友達の思いを受け入れたり、自分の思いを伝えたりしながら、譲り合って遊べるようになる心が育っていくのではないかと思う。

その為には、心を開放して伸び伸びと遊んだり、友達とじっくり思いを伝えあって遊んだりできるゆとりのある生活と、スペースや遊具等の物的環境が必要である。また幼児の感動を受けとめたり、幼児ができたことに対して、認めたり、誉めたり、友達とのパイプ役を任う教師という人的環境が最も大切であるということを感じた。

教師は幼児一人ひとりについて良く知り、幼児にとって今必要な物、必要な言葉は何か、それぞれの幼児がその時に必要としている環境や援助の在り方を、もう一度考え、友達とかかわりながら、生き生きと生活ができるようにしていきたいと思う。

実践事例 2

『積み木遊びを通して』

—友達との関わりができてきた頃の事例—

(1) 対象児

2年保育 4歳児 23名(男児11名, 女児12名)

(2) 時期 7月4日(金)

(3) 入園当初から6月迄の幼児の姿(活動の背景)

入園当初は、初めての集団生活で緊張や期待から気持ちが不安定になる子や入園以前の家庭生活の経験の違いから戸惑いを感じながら生活している幼児が見られたが、すぐに園生活に慣れ元気に遊べる幼児もいた。また元気のよい幼児の中には積み木やブロック等を投げたり、蹴飛ばしたりして乱暴に扱う幼児もおり姿は様々であった。

5月頃になると、自分が生活をする場所や身のまわりにいる先生や友達の名前も徐々に覚えて幼稚園の生活の流れもわかってくるようになった。また、新しい環境に慣れ、教師との信頼関係もでき、心が安定してくると自分からやりたい遊びを見つけて遊ぶようになった。ロッカーが隣同士だったり、同じ場で遊んでいる子とかかわり合う中で、おもしろい遊びをしている幼児の真似をして遊び、気の合う友達ができると物の取り合いや仲間に入れてくれないなどの意見のくい違いから喧嘩になることが多く見られるようになった。

6月になると、先生や友達にも親しみが増してきて、「先生みてて!」と自分に目を向けてもらいたくて要求をしたり、お弁当の時やお帰りの時に気に入った友達と一緒に隣に座りたがったりする様子が見られた。また、2、3人がかたまって遊ぶ姿や「入れて」の言葉を言って仲間に入れてもらう等遊びのルールができてきた。

(4) ねらい

◎好きな遊びをしながら友達と触れ合う楽しさを知る。

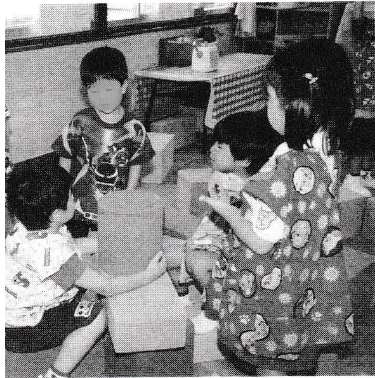
◎自分が思ったことや考えたことを先生や友達に言葉で伝えたり、態度で表す。

(5) 内容

- 自分の好きな遊びを見つけて遊ぶ。
- 自分と同じ遊びをしている友達と一緒にかかわって遊ぶ。
- 自分の思っていることやしてほしいことを先生や友達に話す。

(6) 幼児の姿から

♥…教師の思い

幼 児 の 姿	教 師 の か か わ り
<p>・登園後、身支度を済ませた幼児から好きな遊びを見つけて遊びだしている。いつものように男児数名が、積木で遊びだす。</p> <p>・積み上げたり並べたり崩したりして遊んでいるうちにY夫とH男が、一緒に乗物らしきものを作り始めた。</p> <p>・M男、T夫、I子がそばでそのようすを見ている。 Y夫「うん、電車だよ。」</p> <p>・Y夫が主になって作っている。座る場所ができ、長くつなげている途中で、H男が運転席らしきところに座ろうとした</p> <p>・H男の様子に気付き、「まだ駄目だよ座っちゃ！」と言って手で押し退けようとするが、H男はその場を離れようとはしない。</p> <p>・Y夫が「ぼくが運転手だぞ！」と主張するが、H男も「ぼくが（運転手に）なる」と言い張り、襟首をつかみあう激しい喧嘩が始まった。力付くで引きずり下ろそうとしたが一向に譲ろうとしないので、むりやりあいだに割り込んだ。</p>	<p>♥今日はどんな遊びや友達とのかかわりが生まれるか、楽しみである。</p> <p>・「何かできそうね。座るところがあるから電車かしら。」</p>  <p>♥このころは、自己主張が激しくなり同じ場で遊んでいても個々のイメージで動いていることが多いので喧嘩が生じやすい。このトラブルを通して相手の存在を知っていくよい機会なので、もう少し、二人の様子を見守っていよう。</p>

・M男「Y夫君が運転手だよ」と二人の様子を見て、M男がY夫の加勢をした。

・それを聞いておもしろくないT男は、Y夫を引きずり下ろし、自分がハンドル（円形の積木）を持つ。

・すると、M男はそのハンドルに見立てた積木をとってしまい、H夫と背中合わせに座ったY夫の前にその積木を組み立ててY夫が運転手になれるようにした。

・Y夫は「グイーン！」と言いながら、ハンドルに見立てた円形の積木を操縦して満足そうだ。

・Y夫に運転席を譲ったH夫は少々不満の様子だった。

・I子やK子も後ろの席に乗り、遊びに加わった。

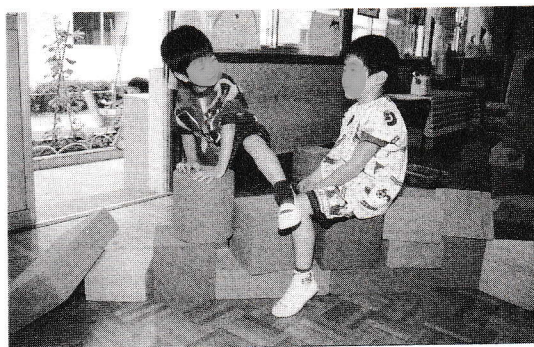
・T夫はそばで、Y夫とH夫が電車ごっこをして遊んでいるのを興味深く見ていた。

・T夫はH男のすぐ後ろに乗せてもらってしばらく電車ごっこが続いた。



♥M男の登場でどう遊びが進展していくのか楽しみである。

♥ここで遊びが終わってしまっただけは、つまらない。声をかけようか迷ったがM男がハンドルをY夫の前においたことで、どう展開していくか、もう少し成り行きを見てみよう。



・「たくさんのお客さんがきたね。運転手さん！どこまで行くのかな」と声をかけた。

♥他の友達も加わってきたので、よりの遊びが広がってほしいな。

♥T夫は最初から積木のそばにいたので、きっと仲間に入りたいのだろう。

・「T夫君、電車に乗りたいの？」「それなら仲間に入れて！って言ってごらん」と促すが、不安そうにしていたので一緒にその場に行き仲間に入れるように見守った。

♥それまで、ずっとY夫が運転手になっていたのだから、さっきのH男の気持ちもY夫に伝えたい。

・「ねえ、H男君も運転手になりたかったんだって交替してあげたらどうかな？」とY夫の心をくみとりながら、H夫に対しても思いやる気持ちを持つように言葉をかける。

・Y夫「うん、わかった。」すんなりと席を譲る。H夫はとても嬉しそうな表情で運転席に座った。

・M男も運転手になりたくて、H夫に小さな声で「ぼくも運転手さんになりたいな。」と言った。

・H夫「うん、いいよ。」とすぐに替った。

・「よかったね。Y夫君ってやさしいね。」と、Y夫が席を譲ってあげたことに対して誉めてあげた。

♥H夫がY夫に対して譲ってくれてありがとうという感謝の心が持てるようになってほしい。

♥あんなに頑なに席を譲ろうとしなかったH夫が友達の要求を受け入れることができるととても嬉しい。

・「H夫君えらいね。」とM夫に運転手さんを譲ってあげたことを認めた。

(7) 考 察

大人の中で大事に育てられ、何でも要求が通る家庭環境にあったY夫と、のびのびして元気がよいがしつけに関しては殆ど放任の状態のH夫が、好きな遊びを通して意見がぶつかり合い、お互い譲らずの取り合いの喧嘩をしていた。その様子を教師は見守りながら、手助けが必要と思われたときに声をかけてあげたことで、素直に譲る気持ちになったと思う。譲ったY夫も、譲ってもらったH夫も「よかったねY夫君て、やさしいね。」という教師の一言で心地よい気持ちになり、あとからT夫が遊びに加わった時もすぐにH夫が運転席をかわってあげることができたことは、積木遊びの中でそれぞれが自分を出し、葛藤しながらも心の成長につながった結果ではないか。

一人一人の育ってきた家庭環境や発達が違う幼児が、幼稚園という集団生活の中で友達とぶつかり合い、かかわり合いながら、遊ぶ楽しさを知り、教師の仲立ちや援助によって、心も身体も育っていくのではないかと思う。幼児一人一人が生き生きと充実した毎日を送れるように、日々幼児とのかかわりの中で柔軟な対応と援助が必要だと思った。

2 5歳児

実践事例 1

『どんぐりを使った遊びを通して』

(1) 対象児

2年保育 5歳児 28名(男児15名, 女児13名)

(2) 時期 9月25日(金)

(3) 2学期の様子

年長組になって、グループやクラスの友達と協力して行なう遊びや活動が多くなったが、一学期のうちはまだ相談することの意味が分からなかったり、自分の考えを上手く伝えられなかったりする幼児も多く、教師の援助がないとこのような活動が長続きできないこともあった。

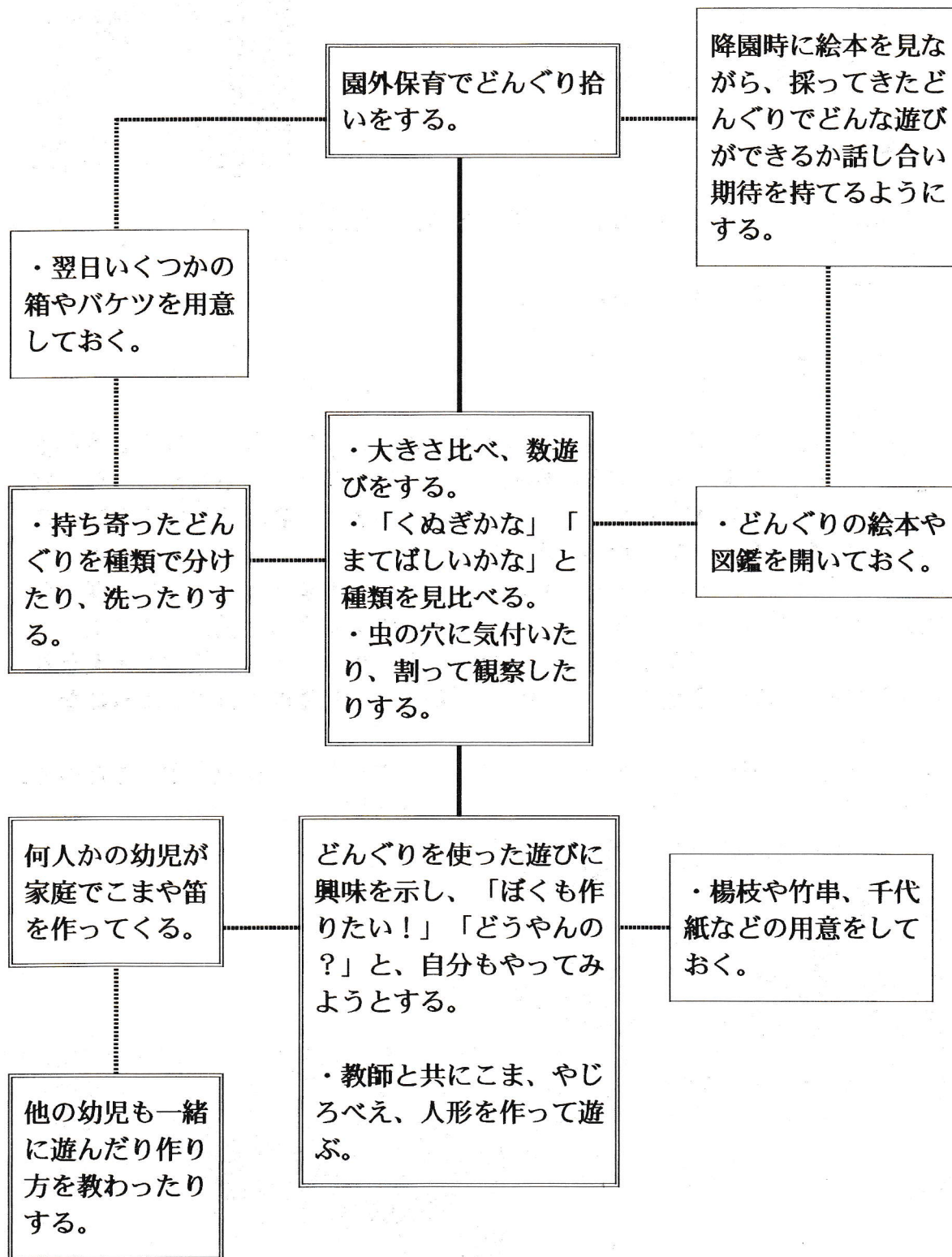
二学期になると、それまであまり親しくなかった友達やより多くの友達ともかかわろうとできるようになり、クラスの友達の輪がさらに広がってきた。

また、一人一人の幼児が落ち着いて物事に取り組んだり、根気強く考えたりする力が身についてきたので、一つの遊びが次第に長期間持続するようになってきた。

中には自ら先頭になって遊びをひっぱっていこうとする幼児が出てきたので、自分達で遊びを進めていくことがだいぶ多くなってきたようである。



(4) どんぐり遊びにおける幼児の姿



(5) ねらい

- ◎自分たちで集めたどんぐりを使って、より多くの友達と遊ぶ楽しさを味わう。
- ◎友達と相談したり、協力しながら自分たちの遊びを進めていこうとする。
- ◎考えやイメージを出し合いながら、工夫して遊ぼうとする。

(6) 内容

- どんぐりを使ってのゲーム作りを考える。
- 相談することで、友達とイメージを共有できることを知る。
- 自分の考えを他の友達に分かるように伝えたり、友達の考えをよく聞いて理解しようとしたりする。
- 相手の考えを受け入れたり、助け合ってやろうとする。
- 友達と協力して作ることで、よりおもしろいものができる喜びを知る。

(7) 活動の姿

♥…教師の思い

幼児の姿	教師のかかわり
<p>朝登園してくると、保育室に用意してあるどんぐりなどの材料の中に空き箱や木片のあることに気が付く。</p> <p>はじめ、一人一人りが木片を箱につけて迷路のようなゲームを作っていた。</p> <ul style="list-style-type: none">・出来上がったものを数人の友達とどんぐりを転がして遊ぶうち、お互いのものをトイレットペーパーの芯や厚紙の筒などでつなぎ合わせて、さらに大きなゲームにする幼児たちもでてきた。 <p>・T男「もっと大きいのが作りたい。」Y男「これでやる？」と傍らの段ボール箱をながめる。</p> <ul style="list-style-type: none">・「でも、深すぎるよ」「手が届かないからだめだよ」「むずかしそうだよ」と言いながら、自分たちのイメージにあった素材を探す。	<p data-bbox="890 1066 1289 1339"></p> <ul style="list-style-type: none">・「すごい、つなげたの？おもしろくなったね。」と、幼児の考えを認める♥友達と一緒に作るのも楽しいことを他の幼児にも知ってほしい。 <p>・幼児たちがどうしたらいいのか戸惑っているようなので、どのように作りたいのか会話をしながら、「じゃあ、これでどう？」と段ボール箱を開き、下に積み木を置いて滑り台のようにする方法を提示する。</p> ♥アイデアを提供したことで、幼児たちの思いを満たせただろうか。

・「うわー！大きい」「よし、どんぐりだ！」と感激しながら、上からたくさんのどんぐりを一気に流す。次の瞬間、数十個というどんぐりが保育室の床いっばいに転がり散らばる。

・「しまった！」「みんな、拾うぞ」「あーあ」と、必死で拾い集める。

・再び「いくよー！」とどんぐりを転がそうとするY男。

・T男「え～またやるの～？」

S男「そうだ、だめだよ」

・「またちらばっちゃうよ」「またひろわなきゃだめになっちゃうよ」

・H男「そうか、ここにこうして…」と下端に空き箱を3つ並べる。

それぞれの箱を3色に色分けして、一気にどんぐりを転がし「青がいちばん（多い）！」「赤こい、赤」など競い合っしばらく遊ぶ。それを見て他の幼児たちも、「ぼくも入れて」「やらせて」と仲間に入ってくる。

・S夫「あ、じゃあさっきのみたいに迷路にしたら？」と斜面の途中に曲げて付けてみる。

・上から転がしたどんぐりが途中で進路をかえていくのを見て「おもしろい！」「もっと付けよう」といろいろな材料を持ってくる。

・トイレットペーパーの芯でトンネルを作ったり、厚紙や箱で曲がり角を作ったりと、各児思いおもいに付けはじめる。

♥たくさんの幼児と一緒に関わって作ることのできる場を与えたい。

・このことをきっかけに、幼児自らが工夫して発展した遊びができないだろうか、どんぐりを一緒に拾いながら幼児たちが次にどうするのか様子を見守っていくことにした。

♥遊びを続けようとするY男の気持ちも汲み取って、遊びを進めてほしい。

・「うまいうまい、よく考えたね」とH男の発想を認め、遊ぶ意欲や自分の思いがだせるよう援助していく。

♥ただ転がすだけではなく、一緒に工夫を出し合いながらもっとおもしろいゲーム作りへと発展していかないだろうか。

・幼児のイメージがうかぶような、素材を用意しておく。

・「こんなのもあるよ」と、厚紙を細長く切ったものを見せる。

♥相談しながらやろうという気持ちが持てないだろうか。

- ・「うんいいよ」「わかった」
- ・「じゃあ、ここはどうするの？」と友達に聞いてからやろうとする。

・ J男が突然斜面の真ん中に切り込みを入れはじめる。

H男「なんでJ男くん、そこ切るんだよ！」S夫「そうだよ、勝手にやらないでよ」

J男「だって…」

・ J男「あのね、ここんとここにどんぐりが落ちればおもしろいよ…」

・ H男「でも、落ちちゃったらおしまいじゃん」S夫「そうだよ、下にいっちゃうよ」

J男は黙ってうつむく。

・ T夫「あ、いいこと考えた！」ゼリーのカップを穴にはめてみせる。「これで落ちないよ」

・ T男「でもさ、それじゃその中にはいんないんじゃない？」

H男「たかいんだよ」

T男「ば～んってあたって、ひよろひよろ～っていっちゃうんじゃない？」

・ S雄「あー！わかった。それじゃこうすりゃいいんだよ」とカップを穴の下から当ててみせる。

・ 「うわー、おもしろい！」「それでいい、おれもやる！」他の幼児も大賛成。

・ S雄「でも、難しいよ…」セロテープでカップを貼ろうとしたが一人では上手くない。

・ 「あらおもしろい！」「よく考えついたね」とそれぞれの工夫を認める。

「先生これ付けていい？」と聞きにくる幼児には「みんなに聞いてごらん」と促したり、「ねえ、Y夫君が、いいこと考えたって」とY男の考えを認め他の幼児に知らせる。

・ J男は、どんな遊びを考えているのだろうか。意欲的に取り組みだしたJ男の気持ちを押し量りながら、「J男君、みんなに聞いてからにしたら？」

・ 「ああなるほど…」とJ男のアイデアに共感する。

♥ J男のアイデアもおもしろいな。誰かこのアイデアを生かせないだろうか

・ 「ねえ、みんなも考えよう。どんぐりが落ちなければいいんだよね」とJ男の考えを認め教師も一緒に考える。

・ 幼児たちからいろいろなアイデアがでてくるように会話のやりとりを聞きながら様子を見守る。

・ 「すごい、S雄君。」とすばらしいアイデアを出した幼児を賞賛する。

♥ 他の友達の意見を受け入れたり、自分の思いを出したりして遊んで欲しい

「ねえ誰か手伝って」「うん、ぼくが押さえてやるよ」などと、協力して作る姿が見られる。

・T夫とT男がペットボトルを教師に切ってもらい、てっぺんに取り付ける。

・ペットボトルの口を指して「ここからどんぐりが発進するの。」「試してみよう」とどんぐりを1個転がしてみたが、入り口の手前のくぼみに引っ掛かって上手く出ない。

・Y男「なんだ、駄目じゃないか」

・S雄「反対にしてみたら?」「うん、それがいい」とペットボトルをひっくり返し、口の部分からどんぐりを入れようとする。「はいらないよ」「やっぱり、さっきの方がいいよ」「できないんじゃない?」他のものを付けていた幼児も加わってくる。

・「よくわかんない」いろいろに置き換えて試してみるが、イメージが湧かない様子。

・しばらく考えていたが、「こうかな」と高く斜めに持ち上げる方法に意見が集まる。「うん、僕もそう思う」

・「1個入れてみて!」斜めに持ち上げた方にどんぐりを入れると、勢い良く転がり出す。「ワーイ、ヤッター」と喜ぶ



・「こういうときはね、誰かが押さえるとうまくいくよ」と力を貸し合って作る方法を知らせる。

♥遊びの中でお互いを必要とし、相手の気持ちを汲む心が芽生えてきたようだ。

・「どうするの?」他のみんなにも伝えられるよう促す。

♥遊びが発展するように考えたT男達の発想をけなしたY男も一緒にうまくいく方法を考えようとする気持ちをもって欲しい。

・いろいろと考えながら試行錯誤している姿を見ながら、幼児には難しいようであると考え助言する。

・「よく見て、この置き方だから止まっちゃうんじゃないかな?」とペットボトルの平らな様子を手で表してみせる。

・ペットボトルを斜めにしたり平らにしたり、いろいろな方法をもう一度ゆっくりとやってみせながら、「どっちの方がよく転がるかな?考えてみて」と問い掛ける。

・「ほんとかなあ、試してみたら?」と、実際にやって確かめるといいことに気付かせる。

♥子ども達が考えたり工夫したりしてきたのだから、うまく転がって欲しい

・「わーすごい大成功」と幼児と共に喜ぶ。

・その後空き箱を下に取り付けてスターも完成し、どんぐりを転がして遊びはじめる。作っていた幼児たちをはじめ、クラスの他の幼児たちも「すごーい!」「やらせて」と仲間に加わり、少しずつ補充や修正を加えながら、数日間このゲームでの遊びを楽しむ幼児たちの姿が見られた。

♥途中であきらめずに遊びを続けることができるようになってきてうれしいな。これからもみんなで協力して遊べるようになって欲しい。



(8) 考察

仲の良い友達同士でも、協同で何かを作るということになると、なかなか考えを上手く伝え合えずに遊びが続かなかったり、一人ふたりが独断で進めていってしまったりすることが多かった。しかし今回は、『自分たちでたくさん集めたどんぐりを使って遊びたい』『段ボールの斜面にこんなゲームを作りたい』という共通の目的が持てた。また、作りたいものがイメージしやすいものであったため比較的簡単に考えを共有でき、一人ひとりが意欲的に取り組み、根気よく問題を解決しようと考えたり、意見を出し合ったりする姿が見られた。

中にはまだ、いい考えが浮かんでも上手く友達に伝える方法が見つけられない幼児、他人への指摘はしてもそれならどうすればいいのか考えようとできない幼児もいる。

そんな時、教師のヒントで再び工夫しようとする姿が見られ、良い発想が生まれるのだと感じた。また、教師や仲間アイデアが認められたことで自信がつき、さらに意欲的に遊びにかかわろうとする幼児の姿も見られた。

今回の遊びは幼児たちから生まれた遊びであり、試行錯誤しながら友達とアイデアを出しあって完成させたこのゲームは、幼児たちにとってとても誇らしいものとなった。実際に作っていたのは男児がほとんどだったが、その後加わってきた女児たちも好意的に交えて、数日間クラスのみんなで楽しむことができた。

この活動を機に、何かをする時友達に相談しようとしたり、友達と手を貸し合ったり分担し合ったりやろうとする姿勢が身についてきたように思う。この遊びに見られるような一つひとつの障壁の積み重ねが、幼児たちの前進のきっかけとなって、次の活動に生かされていくものだと感じた。

